

いっぱしの
女
氷室冴子



いっぱしの

女

氷室冴子

氷室冴子

1957年1月11日 北海道生れ。藤女子大学国文学科卒。「さよならアルルカン」で集英社の青春小説新人賞に佳作入選。以後、「なんて素敵にジャパネスク」シリーズはじめ、コバルト文庫で数々のベストセラーを生み出す。他の著書に『冴子の東京物語』『プレイバックへようこそ』『ターン、3番目に好き』『いもうと物語』等。

いっぱしの女

1992年5月8日 初版第1刷発行

著 者★氷室冴子

発行者★関根栄郷

発行所★株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4

電話 東京5687-2680（営業）5687-2670（編集）

郵便番号 111

振替 東京6-4123

印刷 三松堂株式会社

製本 矢嶋製本株式会社

ISBN 4-480-81308-X C0095

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

© SAEKO HIMURO 1992 Printed in Japan

いっばしの女★目次

まえがきにかえて 6

いっぱしの女の『夢の家』 11

バーブラとミドラー 12

夢の家で暮らすために 21

詠嘆なんか大嫌い 31

とてもすばらしかった旅行について 40

一番とおい他人について 50

いっぱしの女のため息 59

一万二千日めの憂鬱 60

俗物あり 69

さようなら女の子 78

レスについて 88

〈妹の力〉と〈女の大義〉 97

いっぱしの女から男たちへ
107

なるほど
108

年表をめぐる意味について
117

ブラキストン線について
126

シュプレヒコールの歌
136

それは決して『ミザリー』ではない
145

いっぱしの女の生きる時代
155

愕然の日々
156

ありふれた日の夜と昼について
166

羅生門をめぐる連想
176

やっぱり評論もよみたい
185

対談 いっぱしの女大いに語る★高泉淳子＋氷室冴子
195

装丁★ミルキィ・イツベ

いっぱしの
女

まえがきにかえて

人にはさまざまな「忘れられないひとこと」というのがあると思うのだけれど、ここ数年でいえば、私にとってのそれは、

「あなた、やっぱり処女なんですよ」

というものだった。

それは私が三十になるか、ならないかのころのことで、私にそう尋ねたのは四十をひとつふたつ越した男性だった。

彼はとある活字媒体の記者というのか編集者というのか、ともあれそういう人で、当時、その圧倒的な部数ゆえに無視できなくなっていた「少女小説」だの、「少女小説家」だのの記事を書くために、私にインタビューにきたのだった。

彼が聞くのは年収だとか部数だとか、やたらと数字のことばかりで、税務署か興

信所みたいな人だなと思っていただけけれど、その最後のほうで、彼はそう尋ねたのだった。もっと正確にいうなら、

「やっぱり、ああいう小説は処女でなきゃ書けないでしょ」

という言葉づかいで。そのときの彼の口調は、すこしもイヤらしくはなく、どちらかというと好意的だったような気がする。

そのとき私は目からウロコが落ちたというのか、それまでずっとギモンに思っていたことが瞬時にして解明できた気がした。

それまでも、私はいわゆる少女小説関連で、数えきれないインタビューを受けたり、記事を書かれたりしていたのだけれど、いつもいつもピンとこなかった。

単純な話、私は初対面の人や年上の人と話すときは、必ずといっていいほどデスマス体で話すのだけれど、記事になってみると、それがなんというかキャピキャピの女の子語の会話体になっていたりする。

（興にのって、こんな話し方したのかなあ）

と思ひ返してみても、どうも覚えがない。会話体で記事を構成するのは自由だけれど、それは私にとつても好きな領分だから、見過ごせない違和感があったのだった。そして内容はといえば、そのほとんどが質問されたときに、

（親兄弟、親友だつて遠慮して、絶対に聞かないようなことを、どうして初対面の、他人に聞かれなきゃならないんだろう）

とムツとして、けれどノーコメントですという知恵もなにもないばかりに、ぼそぼそ答えた部分が、メインになっていたりするのだった。

そのころ、私はインタビュウもへいただいたお仕事のように考えていて、きちんと答えなければいけないとマジメに考えていたので、ほんとにビックリすることが多かった。こういったことは自分に関するなにかを書かれたことのある人なら、大なり小なり覚えのあることなのかもしれないけれど、私はインタビュアー兼ライターという職業人を、おなじような職種の人と置いていたから、どうして彼（もちろん彼女もたくさんいた）がそういうズレた文章を書くのか、わけがわからなかつ

た。いって悪いけれど、

（アタマ悪いんじゃないか。ヒトのいうこと、ちゃんと聞いてたら、こんな文章になるはずなのに。把握力がないのかな）

と思う時期もあったのだった。不遜にも。

そういう数年間をすごしてきたから、その男性がいろいろインタビューしたあと、ふと気を抜いた雑談のような形で、どちらかといえば年下の女の子をアヤすような優しい態度で、処女でなきゃ書けないんでしょと聞いたとき、

（あー、今までインタビューにきた人も、こういう発想だったのか。そうだったのかー）

と視界がひらけた感じだった。つまり、どうもヒトビトはある予断——さまざまな予断をもって私に会いにきて、その予断を補強する部分だけを聞きとり、書いていたらしいのだ。

わかってみるとコロンブスの卵、むしろ、ありふれた話なのだろうけれど、それ

にしても、いくら童顔で小柄だとはいえ三十まぢかの女に、

「ああいう小説は……処女でなきゃ」

という発想そのものが、常識的に考えても新鮮だったために、いったい世間では三十女にどういうイメージを持っているんだろうと考えることがしばしばだった。

それまでは、新聞を読んで腹をたてたり、本を読んでぼんやり考えたり、映画をみて楽しかったりしても、それはどこまでも個人的なことだと割りきり、ストレートなかたちでは書いたことがなかったのだけれど、その一件があってから、いつか機会があったら、原稿を書くときの、そのときどきのリアルタイムの雑感を書いてみたいなあと思うようになっていた。そうすることで自分がどういう「三十女」なのか、知ってみたい気持ちで。書いてみてわかったけれど、私はこういうことで怒り、こもごも考え、ぼーんやり回想し、喜んでいる女なのだった。

書いていて楽しかったし、こういう場所を与えてくださった『ちくま』編集部と、なんでも自由に、といっただきだった羽田雅美さんに心から感謝いたします。

いっばしの女の
“夢の家”

バーブラとミドラー

最近もらった友人の手紙に、バーブラ・ストライザンドの『追憶』がどうのこうのと書いてあった。

私はよく、友人たちとこういったやりとりをする。そうたいして重要なことでもないんだけど、でも、ちょっとしたニュアンスを伝えたいなあと思うときに、

「ほら、あの映画で、主人公がいうでしょう。あんな感じ……」

みたいな言い方をするわけだ。

昔は、おなじ映画をみていないとコミュニケーションが成り立たず、いつきにマニア（いまでいうオタクかな？）の世界に突入する恐れがあったけれども、今はビ

デオがある。

映画が仲間うちだけの符牒になるのは、映画にとっても不幸なことだから、今みたいにレンタルビデオ屋が繁盛するのはめでたきことだと思う。友人が、

「ほら、あの映画の……」

といい、その友人に友情を感じているとき、すばやくビデオ屋に走ればよいのだから。

で今回、友人はちょっとした恋愛問題を抱えていて、それを控えめに私に伝えるために『追憶』の一シーンを引用したわけだった。女同士の友情は時として、知的でもある。ふむ。

「バーブラがロバート・レッドフォードと別れたあとで、彼に電話をしますね。

“親友はあなたしかいないの。恋人じゃなくていいから、友人としてあたしと話して……”みたいな。あの感じです」

などという、ほとんど暗号みたいな文章にひかれて、私は友情と好奇心のために、

いそいでレンタル屋に走った。

映画はたいそう素晴らしく、壊れた水道みたいに涙をふきこぼしてビデオをみ終わったあと、

「あれ。例のセリフ、例のシーンは、ドコにあったんだろう」

とぼんやりしてしまった。のめりこんでみすぎて、こまかなチェックができなかったのだった。女の友情もけっこう頼りない。

しかし、友人がだしてきた映画もまづかった。なんといってもバーブラ・ストライサンドなもの、迫力がちがう。

彼女がすごいのは、映画をみ終わったあと、

「バーブラはすごいねえ」

と吐息して、最初から最後までバーブラの存在感に圧倒されちゃうことである。

役柄とスターが一体化してしまって、区別がつかない。こういう女優さんは、なぜか七十年代の女優さんに多い。バーブラやジェーン・フォンダや、いろいろと。